

開催校企画シンポジウム 実施結果報告

「貧困をどう捉え、いかに克服していくか」とのテーマで、子ども、野宿者、受刑者の分野の研究での第一人者をシンポジストに迎えた。

まず、貧困が所得やサービス供給の次元のみでは語れなくなっていること、つまり、「つながりの貧困」、「生活基盤の貧困」を含めた構造的貧困・排除を課題にしなければならないことを確認した。かつ、メリトクラシーが進む社会では、目先の利くクレバーな人たちが資産と地位を独占するが、発達障がい、知的障がい、精神障がいがある人たちは、社会の片隅に追いやられ、貧困に陥らざるを得ない現状が進展していることを確認した。その象徴が、野宿や刑事施設に追いやられた人であり、文化的環境を奪われ、情愛からネグレクトされて育つ子どもたちである。

まず山野会員は、子どもの貧困実態を、統計分析も含めて多面的に明らかにした。見えにくい子どもの貧困は、学校において、遅刻や集中力の低下の頻発というかたちで把握できるので、スクールソーシャルワークや学校プラットフォームを充実させ、その兆候を早期に掴んで組織的に対応していく必要性を強調した。そして、ヒューマン・キャピタルとソーシャル・キャピタルの欠如がシンクロして進行していることも指摘した。

貧困ゆえに労働と家事に追われ、育児ネグレクトしている自覚のない親が少なくないとの指摘も重要である。山野氏は、地域住民による児童生徒の家庭への訪問型支援、地域住民による授業支援、学校内での「居場所」づくりなど具体策も紹介した。

フィンランドで取り組まれている「ネウボラ」などのような、専門家による訪問型で対話型の継続的支援による家族全体へのエンパワメントが基本的に整備される必要があるだろう。

次いで、反貧困ネットワーク京都の事務局長で弁護士の舟木氏の報告がなされた。特別措置法によって野宿者は少なくなったが、ホームレスは見えにくくなっただけで、「アパート内ホームレス」に移行した現状があること、精神疾患やコミュニケーションの困難性のある人が少なくないこと、高齢化と長期化が進んでいること、貧困ビジネスと生活保護管理が進んでいることを統計資料と実践体験から語り、この人たちが路上に追いやった側の価値観の変革を求めた。舟木氏らが取り組んでいる「自立支援バックアップセンター」は、ホームレスの人と一緒に花見や納涼祭を行っているが、支援者と当事者が同じ目線で楽しむ試みは自然な相互のエンパワメントの場となっている。

研究者の津富宏は、「リカバリー」概念を、価値ある役割と経験のナラティブ化、再コンテキスト化の回復として定義づけている。かつて、感情労働や情報操作労働の苦手な人にも「農林漁業」や「職人」など価値ある役割があり、オリジナルな個々の物語を語りあう炉辺や縁側や寄り合いがあった。これを舟木氏は、「居心地のいい場所」と表現したが、この生態学でいう「ニッチ niche」をコミュニティのなかに創っていく必要がある。

最後に龍谷大学法学部の浜井教授から、日本の受刑者の現状が、広範で詳細な統計を用いて説明された。社会的なマイノリティが実刑になりやすい刑罰の逆進性と、刑罰システムが

他の社会制度から孤立していること、刑罰後に対するビジョンがないこと、人が更生するのは刑務所ではなくコミュニティの中であることが明確に指摘された。認知行動療法も、一見成績が良いように見えるが、「有効期限は1~2年だ」との指摘には驚かされた。

そして、浜井氏は「縁」としてのソーシャル・キャピタルとヒューマン・キャピタルを保障していくことが必要であるとし、具体的に、イタリアで取り組まれているソーシャルワーカーによるケアマネジメントなどを紹介した。

コーディネーターとして加藤は、以下のことに言及し、登壇者に感謝した。①子育ては親がするものではなくコミュニティが担うものであること、②元野宿者だった人たちが花見会で支援者の子どもと触れ合って、なんともいえない満ち足りた笑顔になる姿を見て、フランク・リースマンの **Helper-Therapy Principle** を想起した。子どもにエンパワメントされることの意味を確かめたい。③下関駅放火事件を起した74歳の累犯老人は知的障がいがあり、身寄りのない人であったが奥田知志が身元引受人になることで初めて刑務所の外で暮らしていきたいと思うようになった。ソーシャル・キャピタルといわれるが、そのコアに関係自体を喜びとする関係が必要。④A.ギデنزの指摘するように、「スマホ環境」によって地域から生々しいものが排除されていく。老い、病、死、狂気、性をギデنزは「経験の隔離」として挙げたが、犯罪も自殺も同様に、経験されなくなっていく。それが犯罪や自殺の減少の背景にあるのではなかろうか。だからこそ、多声的(**multi voice, polyphonic**)対話と物語が必要である。⑤**vulnerable** なこの人たちこそ社会をヒューマンにする光源である。
(加藤博史)